

第三話

# 破壊神

秋本カイ

Illustration

戸谷展洋



そ し て ……

（死んだ看護婦をどうしたらいいのか？）

海老沢悠一の戸惑いに、笹原由宜はあくまで冷静だった。

「何もなくていい」

彼は無表情に指図する。

「何を説明したって、人には見えるものしか見えない」

翌朝、海老沢は、院長室の窓際に立って、外の景色を眺めていた。眼下には隣家の庭がある。白居家の森。昨夜狂い咲いたすべての花が、花弁を落としている。葉子を見送る為だけに、咲いたのだろうか？

月光の下、桜の古木は闇に浮き立っていた。この世ならぬ風景が目には焼き付いている。だのに、遠い。遠い記憶に思える。人は目の当たりにしたのもさえ、信じる事が出来ないのかもしれない。

冬の早朝、朝の光の中、通勤、通学の人々が道を急いでいる。部屋に目を転じれば、机の上には、湯気の立つコーヒーが置かれ、扉の向こうには、廊下を行くストレッチャーの音が聞える。日常がある。昨日も一昨日も続いていた、明日も続くであろう日常。

だのに、このガラス窓ひとつ隔てた隣りの庭はなんとという異空間であることか。自分はなぜ看護婦の死が、明彦の振るつた

力によるものだとわかったのだろう。あの場に居れば、誰だつてわかった。そして、あの場所に居なかった者には、どれほどの言葉を尽くしても、伝えることはできない。

（人には見えるものしか見えない）

笹原の言葉。本当は、見たものであっても、見ないとはいえなかったのだろうか？

見てしまった現実。知ってしまった真実。この世界の隣りに、ぱっくりと異世界が口を開けていることを、受け入れなければならぬということか。

それでも、遠い。絵巻物の世界だった。煙るような桜の花弁が、現実の輪郭をぼかすのか、御伽噺のように心を遠くへ連れ去って行くのか。

浮き立つ白い霞の中、二匹の獣が争っていた。戦国絵のような荒々しい戦い。

若い肩の筋、張切った腕の腱。赤く盛り上った首筋。激情が肉の細胞ひとつひとつを沸き立たせる。込められた力の強さに若者の体そのものが慄いている。

それを押さつける牛のような男は、沈黙のままだ。どのように痛めつけられても黙している。ただ、若い野獣の激情に取り纏る。止めようとしているのかさえ、もはや定かでない。同じ女を愛する、同じ女を失うまいとする二匹の獣。一匹は、おのが半身を愛しむように、もう一匹の背を抱き続ける。

三匹目の獣が立ち上がる。最も狂気を秘めているのは奴だ。

ノックの音。現実の音。振り返ると、返事をする間も与えず、ノブが回った。婦長がうつむきかげんに入ってきて来て、窓辺に院長の姿を見つめる。

「すみません。いらっしやるとは思わず……」

そのまま、いつもの早足で机に近寄り、積み上がった書類を持って。

「この書類頂いて行きます。何かございますか？」

「いや」

海老沢は短く返答する。この婦長のお陰で病院はまわっている。

彼女は、扉を出ようとする所で振り向いた。

「美津子さんのお母様は、やはりおいでにならないとのこと、弟さんがいらっしやるそうです」

「わかった」

返事を返す。それ以外、答えようもない。

高野美津子の死について、普通はどう考えるものなのだろう。違う原因による死が、二つ同時に起こることということは、まず有得ないだろう。病院・事故現場・被災地ならいざ知らず、隣家の出来事である。

葉子の死は、出産が原因で納得がいく。葉子の母も出産で命を落としている。看護婦の死は明彦がもたらした。自分にとつてはそういうことなのだが。第三者には、どちらも謎の死……

いや連続殺人にだつて受け取られかねない。

仮に明彦が殺したということの前提に考えても、思っただけで人を殺せるようになった時、それは殺人と言えるのだろうか？ 自分の肉体を使ってさえ、心神耗弱などと罪を免れる法があるというのに。今の明彦を見るなら、それは耗弱どころか、全く壊れてしまっている。そして、何より、彼は看護婦に指一本触れていない。

海老沢は結局、笹原の言葉には従わなかった。看護婦を病院に連れ帰り、白居家から戻って、病院での作業中突然倒れて亡くなった、と周りに説明した。少しでも葉子の死と引き離したかった。

その上、友康のこともある。頑強に病院に来る事を拒んでいった。が、実際出血が増えると、意識も薄れ『自分で動けるうちに病院へ入ってもらわないと、もつと面倒なことになる』と、笹原に冷たく言われて、それに従った。

再びのノック。

「どうぞ」

海老沢の応えに、反応はなかった。

「どうぞ」

もう一度声をかけると、ゆっくりとノブが回った。

扉の陰に姿を見せたのは、伽耶子だった。

「伽耶ちゃん」

海老沢は思わず、ドアに駆け寄り、出迎えた。白居邸の外で彼女の姿を見た記憶がない。門の前に佇む伽耶子。まるで、二次元の世界に住むように、彼女の姿はそこにしかり思い出せない。こちらから、門の中へ入っても、彼女は固くテリトリーを守って、殆んど人前に姿を現さない。

「なにか？」

「あの……亡くなった看護婦さんは……」

「霊安室だよ。弟さんがみえると連絡が入ってる」

間近で、伽耶子の大きな眸は瞬きもせず、海老沢を見つめた。

「兄があんなことをするなんて」

一瞬、海老沢はその大きな目から、涙が溢れ出るのかと思つた。

「あんなに、姉さんの死を恐れていたのに」

（そうだ、あの三人の男たちは葉子の死を自分の死以上に恐れていた。それなのに、他人の死にはこんなにも鈍感だ。看護婦の死はやすやすともたらされた）

「明彦君のせいじゃない」

心にもない言葉をかけて、海老沢は伽耶子を慰めようとした。

彼女の心に病があることは、この二十歳までの屋敷に籠った生活ぶりから、近所の誰もが知っている。もちろん、人の心が見えるなどという馬鹿げた原因であることは想像の外であろうが。海老沢の記憶の中の伽耶子は、おどおどと視線を合わせな

い小さな女の子だった。こんな風に、人前に出てきて、話をするなどということはなかった。

「明彦君の様子はどうか？」

海老沢は取り繕うように、言葉をかけた。

「私が出て来る時には、まだ眠っていました」

伽耶子の目に涙はなかった。彼女の関心もまた、看護婦の死そのものよりも、兄の犯してしまった罪にあるのだろうか。

伽耶子は溜息をつくように、肩をすぼめて佇んでいる。毎日毎日門の前で兄を待っていた妹。庇護者である姉を失い、慕い続けた兄は殺人者となった。今、彼女は、兄をどう思っているのだろうか。

「兄にとつては、眠りの中で現実が見えないことが一番の安らぎなのだと思います」

海老沢の心を見透かしたような伽耶子の返事だった。

「そうだね」

海老沢は椅子に腰を下ろした。伽耶子は海老沢の真正面の窓際に立った。窓から注がれる朝の光の中で、彼女のシルエツトは余計に細く小さくなる。

「看護婦さんの弟さんに会います」

妙にキツパリとした物言いだった。

「なぜ？」

海老沢が訊ねた。

「なぜ？」

彼の質問に戸惑う表情が浮かぶ。勢い込んで訪ねて来て、口に出した申し出だった。

「なぜ、君が死者の遺族に会うんだい？」

伽耶子は海老沢の言葉を受け止めかねて、首を傾げた。

「会う必要なんかないだろう。彼女はこの病院で勤務中に心筋梗塞で病死したんだ。君にはなんの関係もない」

「兄のしたことは？」

少女には海老沢の言葉の意味がよくわからなかった。

「何をしたというんだ」

「だって、姉さんの死をあんなに恐がっていたのに、死をあんなに恐れていたのに、自分の手で人を……」

伽耶子の言葉を分析するなら、そのキイワードは兄の理不尽さにあるようだ。けれど、死というのは誰にとつてもそうしたものだ。

医者である海老沢のまさに日々の実感である。一人称・二人称・三人称の死。それは全然意味が違う。明彦は葉子を愛し、もちろん海老沢はそれを錯覚だと言いたいのだが、そして、彼女を見つめ続けた。だから、それは『あなたの』二人称の死である。身も知らぬ、ましてあの状況では、そこにいたことさえも気付いていなかったであろう看護婦の死など、三人称の死もいいところだ。加害者と被害者ということさえわかっていないのではないか。

「じゃあ、君はどうしようっていうんだい。兄さんが手も触れ

ずに、看護婦の心臓を鷲掴みにして殺したと話したいのかい？」

伽耶子は海老沢の言葉に唾然としてしまう。彼女のモラルは正しいのに、現実からはかけ離れている。

(そうだ、こちら側とあちら側の世界は違うのだ)

海老沢は朝から何回となく思ったそのことを、今また実感していた。

笹原はずっとこんな世界に住んでいたのか。

(何を説明したって、人には見えるものしか見えない)

それが笹原の結論なのか。

伽耶子は、帰って行った。

海老沢は笹原のことを考えていた。三匹目の獣、笹原由宜。四十才を過ぎて、あれほどギスギスに痩せ細っていたのに、中年太りし始めた。普通のおじさんになってきた。それは、海老沢にとつて喜ばしいことだった。笹原が普通に暮らしていることが、海老沢には大事なことだった。

(ヨリ)

海老沢悠一は、子どもの頃から、笹原由宜をそう呼んだ。同級生として育てられた。けれど、実際の年はわからない。戸籍はなかった。この病院に運び込まれた時、彼は死ぬ寸前だった。骨と皮ばかりとは、ああいう状態を言うのだろう。いつ生まれたのかもわからない。彼はずっとずっと押し入れに閉じ込められていた。

母親は、白居忠保が外で生ませた子である。籍は白居家に入っていた。つまり、葉子の父、嘉一郎と笹原の母は、異母姉弟にあたり、由宜と葉子らは従兄妹となる。かけ離れた従兄妹である。笹原由宜は、全く陽の当たらぬアパートの、真つ暗な押入れに飼われた、たいした餌も与えられぬ、尿も便も垂れ流しの小動物だった。

悠一は、彼がどんな風に人間に戻っていったかを、知っている。十二歳児の平均身長体重の三分の二にも届かなかった由宜は、海老沢病院でどんどん体を取り戻していった。歩く・座る・手を使う、由宜は神経症の子どものように、見ているほうが痛くなるほどの熱心さで繰り返し練習していた。もともと並外れた知能を持っていたのだと思う。物を覚える時には、全く周りの見えなくなる集中力だった。そうでなければ、彼はその虐待の後遺症の中に一生埋もれていたに違いない。それを跳ね返す為には、人の何倍もの知能と意志の力が必要だった。

病院の跡取としてちやほや育てられた海老沢にとっては、想像を絶する生き物だった。目覚しい成長を遂げ、人の称賛を受けながら、ヨリがトイレで吐いている所を何度も見た。自分にとっての普通の生活が、自分にとっての平穩が、ヨリにとってはなんだったのだろうか？ いつまでもいつまでも吐き続けるヨリを、涙を流しながら、そのくせ何に涙を流しているのか訳も判らず、見つめていた。子どもだった頃の記憶である。海老沢にとってはいっしょか、ヨリが幸せに暮らしているということが、

人生における自分の平安の目安になっていた。けれど、不幸はすべて彼に吸い寄せられて行く。なぜだろう。なぜ、彼をこれほどまでに、打ちのめさずにはおかないのだろうか。

婦長は再び部屋へ入ってくると、高野美津子の弟が訪れたことを告げた。

「今、美津子さんに会いに靈安室へ」

「わかった、すぐ行く」

と言いながら、ふと一抹の不安が心を掠め、時計を見た。伽耶子が部屋を出て、二十分以上経っている。線香をあげに、靈安室に立ち寄ったとしても、美津子の弟と鉢合わせすることはないだろう。

伽耶子には明彦が殺人者であるということの意味がわかっていない。

靈安室に、伽耶子はいた。蒼い顔で俯く弟と何か話していた。

「高野さん、この度は本当に」

部屋に入るなり、海老沢は二人の間に割って入るように、声をかけた。思いがけず大きな声が出て、靈安室の静けさを異様に壊した気がした。弟は、顔を上げて、海老沢を見た。姉によく似た面差しだった。

「私はこれで」

海老沢が現れたのを機に、話を切り上げたのか、伽耶子は軽

く会釈してドアへ向かった。扉を出ようとしながら、  
「病院の門を出た右に、少し行くと銀杏の木があつて、ベンチ  
と……」

言葉は途切れた。はつとした表情で伽耶子は口を嚙み、その  
ままそそくさと部屋を出ていった。

「よく働いてくれて、患者さんからも頼られていました。本当  
に残念です」

「一体どうして……姉は丈夫なことが自慢で、よく自分の看護  
婦として一番の取り柄は体力だつて」

言葉が滲んで途絶えた。この弟の言う通り、彼女はお世辞で  
はなく、骨惜しみなく働く、メンタルもフィジカルも強い看護  
師だった。

「先天的なものだと思えます。今まで症状が出なかつただけで、  
胸にへこみがありました。まれに左右の肋骨の間が極端に窪ん  
でいる人がいて、狭窄症を引き起こすことがあります。本人さ  
えも気付いていなかったかもしれない。それが、体の成長に  
伴つて、大きく歪んで、この心筋梗塞を引き起こしたのでしょ  
う。健康診断でも個人的な体型の偏り程度で見過ごされてきた  
ものと思われます」

話ながら、自分自身の不自然さをひしひしと感じていた。

(何もしなくていい)

ここでも、笹原の言葉は正しい。心にある疚しさが、心筋梗  
塞の説明にこんなにも言葉を費やさせる。まるで、探偵ドラマ

の犯人のようだ。

弟は唾然とした表情で海老沢を見つめるばかりである。今の  
言葉をどれほど理解したもののか。

「あの……このあととはどのように」

「葬儀の手配は姉長と相談して下さい」

「先ほどの女性が……」

「何か？」

「姉が、彼女のお兄さんとお付き合ひしていたと」

「私は、全く知りませんでした」

思いもかけない弟の言葉に海老沢は辛うじて返答を返した。

「院長」

ちようど一人の看護師が彼を探して部屋に入って来た。

「うん、うん、わかつた。すみません、ちよつと急患が入つて。

すぐに、姉長を寄越します」

海老沢は霊安室を出た。一体伽耶子は、高野美津子の弟とど  
んな会話を交わしたのだ。なんのために、明彦が美津子と付き  
合つていたなどと言つたのか？

一人になると、高野洋二は、込み上げて来る嗚咽を押さえる  
ことが出来なかつた。小さい頃から、姉のことが大好きだつた。

優しく、面倒見の良い姉は、誰からも好かれたし、そのこと  
が洋二の自慢だつた。

父を早くに亡くし、精神薄弱の長男を抱えた母は、働くこと

と、兄の介護に必死で、洋二はいつも姉の美津子に任せられていた。姉は、地元で母や兄を助けて働きたかったようだが、就職口は見つからず、看護師の資格を取った東京でそのまま働き続け、送金してきた。今年洋二は、地元の県警を落ちた後、秋に警視庁の試験を受けた。どういふ偶然かそちらの方には受かった。弟まで東京に出て来て、母と兄、二人の暮らしになることを姉は心配していたが、それとは別に、やはり洋二が近くに住むことはうれいと言った。

姉と最後に会ったのは、二次試験を受け、東京へ来た時だった。一晚姉の部屋に泊まった。

洋二は煙草を吸う。品行方正な、中高校生時代を送ってきたが、これだけは止められなかった。父が肺ガンで死んでいるので、母には隠れて吸っていた。姉の部屋に泊まった時は、試験前日で落ち着けず、吸わずにはいられなかった。

「これ以外は、みんな我慢してんだもん、しょうがないよね」  
 姉はそんな風に言ってくれた。

「だったらさあ、ほら、こういう……なんていうの、お父さんが煙草吸う時、よく使ってた、あの、吸い口って言ったかなあ、ああいうのつけたら、少しは体の為がいいんじゃないかしら」  
 姉が心配してくれているのはよくわかった。姉にとって、自分が大事な存在であることをしみじみ感じた。  
 それきり煙草は吸っていなかった。

ひとしきりの嗚咽が遠のく。ぼんやりしたまま物言わぬ姉の傍らにいた。ポケットに手を入れた。煙草がある。

姉の死を知らされ、兄を置いて遠出出来ない母の代わりに、洋二が東京へ向かった。バスを待つ時間に、いつもの店でガムを買い、そして煙草を買った。

(そうだ、煙草、買ったんだ)

ビニールのパッケージの冷たいすべすべした手触りが、妙にほっとした感触だった。

姉が死んで、姉の自分への思いが消えて、自分の存在さえも軽くなってしまった。煙草を我慢する理由が見当たらない。

廊下に出た。病院内で吸える所はないだろう。洋二は病院の門を出た。右へ歩く。バス停が見えた。銀杏の木とベンチと吸殻入れがあった。

『病院の門を出て、右に少し行くと、銀杏の木があつて、ベンチと……』

別れ際、白居伽耶子と名乗る女性の唐突な言葉。

(あれは、なんだったのだろう)

伽耶子にはもう一カ所、訪ねねばならない所があった。友康の病室である。三階のその個室のドアを入ると、友康はベッドから起き上がった。お互い言葉も発せぬまま、見詰め合っていた。姉と同じで、彼の心の中は見えない。彼の心はピタリと閉じられている。なぜなのか伽耶子は知らない。伽耶子は望んで



人の心を読む訳ではない。むしろ、人が発してくるのである。助けを求めて手を伸ばすように、心の声を発して来る。

友康は決して発さない。昨夜、明彦を止める言葉を発さなかつたように。自分の痛みを発さなかつたように。友康は全てを自分の内に閉じ込める。姉への思いを、自分の心の悲鳴を、深く深く閉じ込めて行く。

「強い人」

伽耶子の呟きに、友康はただ静かに首を振った。

「姉さんに開いた心も、私には開かれない。姉さんの内側には一体なにが詰まっていたの？」

友康が口を開きかけた。

「なに？」

伽耶子の傾げた小首に答えるように、友康は重い口を開いた。

けれど、それは問いへの答えではなかつた。

「明彦君のことは、自分が面倒をみる」

伽耶子はゆっくり頷いた。

「そして、私は……」

伽耶子は葉子の最期を反芻していた。姉の最期の言葉。友康と自分。二人だけがあの時、あの場にいた。

帰り際、三階の廊下の窓から、病院の塀の向こうにある銀杏の街路樹が見えた。高野洋二がベンチに座って、煙草をふかしている。バスが着いた。一人の男が降り立つ。

伽耶子には、煙草を燻らす男とバスから降り立つた男の運命の糸が合わさっている様が見えた。

ここですれ違ったことを、彼らは生涯知らないだろう。彼らは今、一面識もなく、今日この時間ここにいたことを話し合う時が来るはずもない。互いが記憶の中に顔をとどめることはなく、すれ違っただけの人間を知覚したかもわからない。

けれど、三階の窓から二人を見下ろす伽耶子には、未来に二人が出会い、自分たちの運命にさえ、関わって来ることが感じられた。

人を読む力とともに、自分に加わって来た未来を、運命を読む力は、姉が自分に置いていったものなのだろうか。それとも、兄の心が京子の死んだ朝、変容したように、自分の中にあつた何かが、本来持っていた力を取り戻し始めているのかもしれない。

## 桜の木の 下

内海たすくは、バスを降りた。胸に苦々しい思いがあつた。祖父に対して、結局、今日のこの訪問を断り切れなかつた。

幼かつたたすくの叔母の記憶は、日傘を陰に微笑んでいた。あまり丈夫ではなかつた。色の白さや指の細さが印象に残っている。その後の生活ぶりを聞くにつけ、たすくの心は痛んだ。

そして、この計報である。もちろん、線香をあげるのがいやだったのではない。男に会うのがいやだったのだ。

片田舎ではあるが、祖父は警察署長にまでなった人である。長男である父は私立の大学教授となったが、今、たすく自身は警視庁に勤務している。堅いエリート一家であった。なのに、一家に溺愛されていた父の妹、百合絵は駆け落ち同然に一五才も年上の男と夫婦になった。怒った祖父は娘を勘当し、それきりたすくは叔母と会っていない。

たすくが子どもの頃、祖父母の家には、両親とたすく、そして父の妹である百合絵がいっしょに住んでいた。たすくは大人しくて優しい叔母によくついた。それきり会っていないせいも、たすくにとって叔母は夢の世界に住まう人のようだった。儚げで、日傘が彼女を守っていた。それがどうして男と駆け落ちするようになったのだろう。

「つまらない男にだまされて」

「あのか細い手で家事をしていると思うと胸がつまる」

「もう少し世間をいうものがわかっていれば」

まるで、天国から追い出された天女を案じる神々のように大人たちは彼女への心配を口にした。たすくは当然、男に怒りを覚えた。彼女を連れ去った暴力的で野卑な男に心から憤っていた。

結局子どもが出来なかったせいもあってか、和解のきつかけは生まれず、そのまま二十数年が過ぎ、叔母は他界した。

男からは何の連絡もなかった。祖母が病にかかり、それを伝えようとして、すでに二年も前に亡くなったことを知らされた。祖父にはもうそのことをなじり、あの勘当した日のように、怒りにまかせて男を拒絶するエネルギーは残っていないかった。たすくは、祖父に娘の墓へ線香をあげて来て欲しいと頼まれた。「あの子は親より先に逝ってしまっただ。もう何を言っても、何をしても意味がない」

祖父の言葉に、たすくは断る術を知らなかった。

バス停のベンチで、煙草を吸う若者の隣りに、腰を下ろした。通りを真つ直ぐ、大きな木箱を自転車の荷台に積んだ老人がこちらへ向かってやって来た。行人だということはわかったが、何を売っているのか、たすくはそういう姿をみたことがなかった。その男は、自転車を止めて、たすくに近付いてきた。それでも、まだ何かピンとこなかった。

「内海たすくさんですか？」

声をかけられて初めて、

（ああ、この男なのか）

と思った。

たすくが長年膨らませてきた像とは、全くの別人だった。貧相で腰を屈めたまま、たすくを覗き込む男の声はくぐもつて聞き取り難かった。

「はい」

たすくは、ベンチから立ち上がった後も、それ以上言葉が継げなかった。男も、言葉を捜すでも、かけるでもなく、すぐにたすくに背を向け、自転車のスタンドを外すと

「墓まで案内します」

とだけ言って、歩き始めた。

たすくはその後を歩いた。

叔母の最期、男の近況、祖父母の恨み言、どうしてこんなことになってしまったのか。言葉は嵐のように頭の中を駆け巡っていたけれど、どこまでも意地を張り続ける子どものように、たすくは押し黙っていた。何の説明もしない男に苛立っていた。その風貌を見た時に、はぐらかされてしまった怒りが、黙々と自転車をひく男の背に向けて、再び募っていくようだった。

だからだとした坂を下る。右側はずっと塀になっている。塀の中途にある長屋門の前で男は立ち止まった。

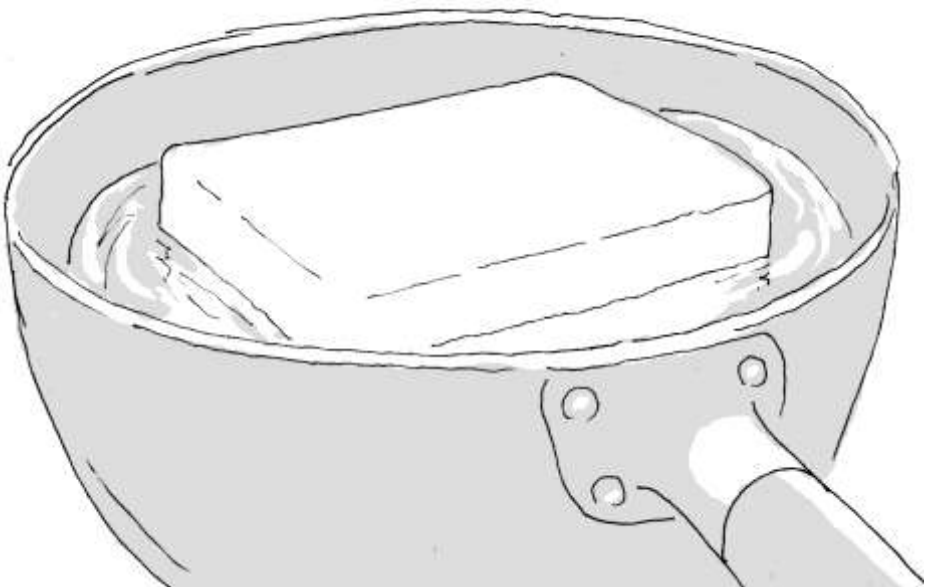
「ちよっと、ここで待っていて下さい」

男の言葉は、平易で、たすくへの何の感情も見えない。木箱の蓋を押し開けて、小さな手鍋に、豆腐を入れた。

(豆腐屋なのか)

そのまま、馴れた動作で、門の脇の通用口から中へと入って行った。開け放たれた戸口から、たすくは男の後ろ姿を見ていた。敷石の上を小走りに奥へ入って行く。

そこへ中から、二十代のかなり長身の男が現れた。寝間着姿で、裸足だった。体の中心がとれないようで、ふらふらと右へ



左へ足を連れさせながら、手で宙をかくように走っている。

(葉?)

職業柄、たすくの頭には、すぐにそれが浮かんだ。

豆腐屋を避けるように、男は左へ折り返した。家の横手へ向かう。

豆腐屋は手鍋を投げ出して、彼を追った。自然とたすくも二人の後を追った、それほど、若い男の雰囲気は異様だった。

広い庭だ。いったいここは何なのだろう。個人宅とも思えない。多様な樹木が勝手に生い茂っている。

家屋に接した裏庭にあたるのか、少し開けた場所に桜の古木があった。若い男はその根元まで、やつとといった様子で辿り着くと、細い体を折って、その木に抱きつくように倒れて行った。

たすくは、息を呑んだ。地面は桜の花弁に埋もれている。この古木すべてに花が咲き、今、散った、という風情だった。

豆腐屋を追い抜いて、若者を抱き起こした。寝間着に血がついていた。木にも、大量の血が溢れていた。

今一瞬、たすくの目には、若者の体を抱き止めた古木が、凶器でこの細い体を貫いたように見えた。

「救急車を！」

後ろに立った豆腐屋に声をかけた。

「明彦さん」

家の中から、女性が飛び出して来た。老年にさしかかろうと

いう所だろうか。

「あなたは？」

女性の声音は警戒を示している。

「私の親戚で」

豆腐屋が答えた。

「いつものように、豆腐をお届けにあがったんですが、明彦さんが急に飛び出して来られて……どうかなすったんですか？」

「不幸があつて」

女性は、ゆっくり近付いて来た。

「でも、大丈夫です」

(そんな悠長な会話をしてる場合か！)

たすくは、視線を明彦に戻した。血はなかった。

庭を振り返った。花弁はなかった。

(今のは……)

「すみません。私の力では無理なので、明彦さんをお布団まで運んで頂けませんでしょうか。よく眠っていらしたので、ちょっと目を離れたすきに、外へ出られたようで」

朝の光が降り注いで来る。幻覚を見るような時刻ではない。

すべてが、くっきりと世界をくまどつてゐる。ただ、抱き上げた若者の軽さと浮世離れた寝顔のあどけなさが、不思議な世界に迷い込んでしまった錯覚を与えた。

男の案内で寺に着いた。先に、墓へ詣でた。

叔母の墓石の側面には、叔母の戒名だけが、刻まれている。没年月日は、ちょうど二年前の昨日になっていた。

豆腐屋とは、たいした言葉を交わすこともなく、すぐに別れた。その後、本堂に立ち寄って、住職にお布施を手渡ししながら少し話を聞いた。

叔母の夫である豆腐屋には、全く身寄りがないという。自分の家に一番近いこの寺の住職に頼み込んで、大枚叩いてこの墓を買ったのだろう。住職がよく墓参りに訪れていると言った。

そんな純愛めいた話は聞きたくもなかった。一人この墓に眠る叔母の横に、やがて、あの男も眠るのだと思うと、今すぐにも、叔母の骨を内海家の菩提寺へ持ち帰りたいかった。

来客があるのか、寺の他の部屋がざわついている。

「大きな葬儀になるようなので」

住職の言葉に、たすくは先程のことが頭に浮かんだ。

「森の家……白居家の葬儀ですか？」

(森の家)

豆腐屋は確かそう呼んでいた。長屋門の表札に白居と書かれているのも目にした。あのタズさんという女性は、昨夜、当主の葉子が自宅で出産し、亡くなったと語った。弟の明彦はもとも精神を病んでおり、このままでは病院に入れるしかないだろうと、豆腐屋に説明していた。

二人の会話に口を挟むことはできなかった。自分の見た血と花弁を、二人に確認なぞしたら、それこそたすく自身、病院に

行った方がいいと言われかねない。それにしても、あの一瞬の光景。桜の古木の殺意。本当に昨夜あの屋敷で、人が死んだのだ。木も土も空気も、あの空間のすべてが証拠隠滅を謀る、愚かな作為に満ちている気がした。

「あの家はこの寺なんぞよりずっと古いんですよ」

「どのくらい？」

「関東大震災や空襲の時には、ここいらの住民はみんなあの森に避難したそうです。木の植え方がそうなっているとかで、なんでいるか、簡単に言うなら水分を多く持つ木が外側になっていて、うまく自分たちで自分たちの森を守るんですよ」

「明治時代からあったということですか？」

「いや、そんなもんじゃないでしょう。江戸時代の記録にも第四社嗣として残っているし、大体あの木の樹齢からして、相当なもんですよ。狐だったら、尻尾が九尾に割れるほどでしょう」

「狐ですか？」

「たとえが変ですか？」

話好きの住職は禿げた頭を掻いた。

「でもね、私はあの森は変だと思ってますよ。拙僧のこんな寺の庭でも木の手入れは大変なんです。南の国道沿いの木なんぞは、何年かに一度は、クレーン車みたいなの、あんなもんを頼んで切っています。どんどん伸びて行って道路に覆い被さっていくし、電線に届いてしまうし、根だつてあまりに張り出せば

塀を壊す。お金もかかるし、手間もかかる。

ところが、あの森はいい子なんですよ。白居家に迷惑をかける。周りの住民に恩を売ったり、テリトリーから出ないことで、何世紀も生き延びてきたんでしょいうな」

(あの桜の花弁)

「最も中に住んでいる人間の方はかなりひどいことになってるが。葉子さんが亡くなつてはもうどうにもならないでしょう」

明彦を布団に運んだ時の感触が蘇えつた。

「かなりひどいこと？」

「しまった。今のはなかったことにして下さい。うちの親父にでも聞かれたら、寺を追い出されますよ。もう八十歳を超えてるといふのに、元氣な爺さんで」

「ここは、白居家の菩提寺なんですか」

「そうです。もともと白居家のために建てられた寺ですから」

たすくは、叔母の夫であるあの男について、たいした理解をすることはできなかった。しかし、あの屋敷を出る前に、落とした片手鍋を洗って、もう一度豆腐を入れ直し、勝手口から置いてくる姿を見た。毎日、売りに出る前に届けているのだという。

「なぜ？」

たすくの問いに、豆腐屋は

「なぜ？ そんなことは、考えた事もなかった」

と答えた。

まるで、雪の積もるお地蔵様に笠をつけてやった爺さんのようだ。豆腐屋の風貌も実にそんな風だった。住職の父もそんなのだろうか。

笹 原 由 宜

海老沢は、葬儀の後、病院に戻った。どっと、疲れが出た。自身の彼は、あまり病院と自宅の区別がなかった。姉家族が、父母と同居していたし、義兄が病院の経営を行っていたので、身分的には非常に楽なのだ。入院施設のすぐ裏手に、二世帯住宅のような作りで、悠一の居住部分も建っていたが、台所も風呂場もほとんど使っていない。メンテナンスの手間を考えると面倒で、なんでも病院で済ませてしまった。そのうち姉夫婦の長男が結婚でもしたら、自分は、研究室に引越して来てほしいと思つている。

葉子の遺体も、看護婦の遺体も、無くなって、もう記憶の中にしか真実はない。友康も明彦も葬儀には出ていない。伽耶子が喪主だった。すべての人々の視線が彼女に集まっていたと言つても過言ではないだろう。サクヤグループは動かなかった。笹原が押さえたのだ。葉子は、一株主という以外の肩書きは持っていない。密葬ということで、あえてその死を公表することはしなかった。

それでも、どこから聞きつけるのか、政財界の大物の姿もあった。義理ではなく、彼女に心を寄せる人間たちがいる。彼らが皆、伽耶子を見ていた。葉子の不思議な目を、果たしてその妹も持っているのであらうか。人を導く目、未来の見える目。葉子の欲では動かぬ目は、むしろ欲の泥の中にのたうつ人間にこそ愛されていた。

葬儀中、海老沢は何度も笹原を振り返った。葉子の死を嘆く笹原が見たかったのかもしれない。涙を浮かべる笹原が見たかったのかもしれない。何もなかった。いつもの笹原だった。

葬儀の後、笹原の妻、弓子と話をした。

弓子は気弱な笑みを浮かべた。

「笹原は、この三日間、夜中に戻って二時間で家を出なければならぬ時でも帰ってきます」

「それはどうということ？」

「玄関に生けた花を、靴を脱ぐ時、目で追っているのがわかるんです」

弓子の曖昧な説明が海老沢の不安を煽る。

「葉子さんが亡くなって、あの人はちゃんと生きていけるんでしょうか」

不安なのはむしろ弓子の方だろうか。

「ヨリが毎日帰って来るのが心配なんでしょうか？」

「あの人が苦しくないならいいんです。辛くないなら」

海老沢は弓子を抱きしめたくなくなっていた。まるで笹原の保護者でもあるかのように、二人は長年こんな会話をしてきた気がする。笹原由宜の不安定さが二人を近づけている。

笹原が餓死寸前で保護されたのが、海老沢の病院であるなら、片や、弓子の祖母は笹原親子の住む地域の民生委員として親子の面倒をみていた。何度かアパートの部屋を訪ねている。笹原が押入れに閉じ込められていない時の唯一の記憶は、この弓子の家だった。笹原の母が男と遊び歩く間、置き去りにされた由宜を、弓子の祖母は家へ連れ帰って面倒みた。小学生だった弓子はこの可哀な幼児を大層可愛がった。笹原にとっては天国の記憶といってもいいほどのものだった。

後に、祖母の一人息子、つまり弓子の父は、詐欺にあつて自分の会社を倒産させた。家は人手に渡り、他人の世話をするどころではなくなった。

「帰ります」

弓子が小さく言った。

家で笹原の帰りを待つのだろう。

つまらない書類を書くだけでも相当な仕事量だ。しばらく笹原は雑事に忙殺されるだろう。この森の家の相続も、サクヤグループの行く末も奴の肩にかかっている。

「ヨリは、今、サクヤグループのトップとなつて、あなたとい

う奥さんがいて、それでいいでしょう。何も欠けた所なんてないんだ」

弓子は海老沢の言葉には答えなかつた。

海老沢は、黒いネクタイと上着を脱ぎ捨てると、院長室のソファに体を沈めた。そして、弓子と自分が夫婦で、由宜が息子であるような、馬鹿馬鹿しい夢を見た。細部は定かでないが、弓子と悠一は、マツチ棒の燃えかすのようになったヨリを抱えて、泣きながら途方にくれていた。

目が覚めた時、こんな夢を見るのは、『あの日のせいだ』と思つた。

アパート家賃の滞納、異臭。民生委員の立川氏立会いのもと、大家は合鍵で部屋を開けた。ゴミと蠅とゴキブリの詰まつた部屋の奥の押し入れから、ゴミと判別つきかねるような、ミイラのようになつた少年が出てきた。

立川は、前の民生委員であつた鈴木とよから、この部屋の借り主の女性に子どもがいることは聞いていた。だから、自分が民生委員を引き受けてすぐ、五、六年前になるだろうか、訪問して、そのことを女性に問い質した。子どもは小学生になるのである、自分の親に預けて学校に通わせることになつたと言つた。それを鵜呑みにした。

(あれから、ずっとこの子はここに押し込められたままだつた

のだろうか)

救急車を呼んだ。子どもを近くの病院へ搬送した。いかなる偶然か。その前任者の鈴木とよとは、病院の裏口でばつたり出会つた。彼女は孫と買物物の帰りだつた。

「立川さん、どうした？」

いつもの気安い声のかけように、立川はつい手短に状況を説明した。すぐに反応したのは、横で話を聞いていた孫の弓子の方だつた。

「あれ、よつちゃんなの！」

ストレッチャーを追い駆けた。そして、その上の黒くぼろぼろの塊を見ると、抱きつくように手を伸ばした。周りの救急隊員に制されて、それでも、彼女は取り縋つていた。

三十年も前のこの光景を、海老沢ははつきりと覚えてゐる。自分がどこにいたのか、どういう状況だったのかは、全く記憶にないのだが。彼には、救急車から下ろされたものは、得体の知れない汚物に見えた。おさげ髪の子高生が悲鳴のような声を上げて、それを抱きしめた。

(自分と弓子は、あの日、あの笹原の姿を見てしまったから、その呪縛から逃れられないのだ。彼が理不尽に踏みつけられた負の部分回復する姿が見たい。もし、回復できないのなら……)

昔、弓子が自分のことを水を張つたコップにたとえた事があ



る。そして、笹原は海なのだ。地震が来た時、水がどう揺れるか？ コップは倒れて、自らの水さえ零してしまうかもしれない。けれど、海は津波を引き起こして、多くのものを飲み尽くし、多くの人を殺す。人それぞれの器の大きさを語ることがあるが、影響力という点で言うなら、器の大きさはプラスにばかり働くわけではない。平時の海の大きさは、災厄をもたらす時にふるわれる力の大きさでもある。

あの状況でも生き残った笹原の生命力。そして、その後共に暮らして、彼の生きて何かを掴み取ろうとする力の強さに、驚嘆すべきものがある事を知っている。それでも、彼に平安はもたらされない。海老沢と弓子は、おろかしい親のように、由宜の振舞いを見つめている。彼の中に平安が生まれなければ、彼の受けた負債を回復できないのなら、彼はその力をどこへ向けて使うのだろう。

翌日、海老沢は、いつものように院長室に入って来た婦長に起こされた。

「院長、おウチまで、三分もかかりません。夜はちゃんと布団で寝て下さい」

十年一日の如く勤務している婦長をしみじみ眺めた。安定した人。病院や町や家庭や。日常を支えるこうした人々。

「それから、樋山友康さんですが、白居家にお勤めだったんですよね。労災なんかには加入してないかしら？」

「えっ？」

海老沢は二の句が告げなかった。

確かに世の中は、そうしたもので成り立っているが、あの友康には、あまりにそぐわない。大体、馬鹿馬鹿しい話だが、友康に苗字があると思つた事がない。

海老沢の疑問符を婦長は、そういうことには受け取らなかったように、説明を始めた。

「この間の落雷で駄目になった木から臼を作ろうとしていて、鎌で怪我をした訳ですよ。それって、やっぱり勤務中の怪我ってことになるんじゃないでしょうか。そうしたことが樋山さんの仕事なわけですから」

（そうか、友康は怪我の説明をそんな風にしたのか）

海老沢は事実を知っているだけに、とっさにくまなく言葉がみつからなかった。それにしても、看護婦たちも印象に残っている、ついこの間の森への落雷を怪我に結びつけたのは、効を奏している。そちらのインパクトに押されて、傷の形を疑問視するに至らないだろう。それを意図したなら、友康は愚鈍な人間どころではない。

（帰ってこなかった）

弓子は、外に出て植木に水をやった。日が昇り始めている。玄関の方で音がした。

由宜だった。

「おかえりなさい」

「ああ」

靴を脱ぎながら、今朝、弓子が花瓶に生けた花へ目がいく。白い小菊だった。十何年も前に一度（なんかこの時間が一番ほつとする）と口にしたことがあった。それから、弓子は玄關の花をかかしたことがない。

「お食事は？」

「ああ」

上の空の返事だ。そのまま寝室のベッドに倒れ伏して、寝てしまう。弓子は寝やすいように、少し体の向きを変え、ネクタイを緩めた。元気な時には帰って来ない。帰ってくるのは、心が萎えているからだ。

「何がしてあげられるんだろう」

年月が経っても、弓子にとって由宜はあの日の小さな子どもだった。自分たちの都合で手を放している間に、酷い目にあわせてしまった。彼女も祖母もずっとやりきれない気持ちでいた。弓子はたまに、海老沢病院に引き取られた由宜を、遠目に見に行っていた。どんどん元気になって、海老沢病院の息子とふざけあっている姿を見ると、涙が零れそうになった。

やがて、祖母を病気で亡くし、両親を交通事故で亡くし、二十三才で弓子は天涯孤独の身となってしまった。笹原由宜と再会したのはその一年後だった。

ある日、アパートのドアの前に一人の若者が立っていた。浮浪者といった身なりだった。背は弓子より少し高かった。痩せ細っていて、だらしない立ち姿だったが、弓子の姿を見た途端に、すつと背筋が伸びた。緊張した表情と作り笑顔が半々だった。

「笹原由宜。笹原由宜。笹原由宜。笹原由宜です」

勢い込んで、四回も名前を繰り返して、名乗った。

「よっちゃあん？」

弓子が問い直すと、緊張の溶けた瞬間、破顔した。無邪気な笑顔だった。子どもが得意になった時のような顔だった。

ホームレスになっている。ゴミを漁っていた時、弓子を見かけた、と言った。確かに今、弓子はスーパで働いている。ゴミ出しにも行く。

「でも、よくわかったわね」

弓子の疑問に、由宜は胸を指差した。ネームプレートを見たということだろう。

「覚えてたんだ」

由宜は、大きく頷く。

「鈴木弓子」

また、得意げな表情を見せる。

初めての会話はそれぐらいだった。

「また来ます」



由宜はぺこりとお辞儀をして、すぐに帰ってしまった。

そして、言葉通り、次の日も次の日も由宜はやって来た。本当に一目、弓子の顔を見て帰って行く。一週間、二週間と経つうちに身なりも少しづつ良くなっていった。バイトを始めたと言い、やがて正社員になったと言った。

弓子のはつきり言って、彼をどう扱ったらいいのかわからなかった。家族を無くし、今、弓子は心から家族を欲していた。けれど、他人であるこの少年とどういう家族関係を結んだらいいものなのか。

何ヶ月か経つうちに、彼を部屋に入れ、食事をさせ、いっしょに眠った。何の経験もない、知識も、駆け引きも持たぬ彼らが、男と女の関係を結ぶまでには随分と時間がかかった。弓子のお腹に子どもが出来た。そのまま幸せな家族になれば良かった。由宜がどんなにそれを望んでいたことか。普通の家族、普通の家庭。由宜が生き直す為には、人生の奪われてしまった部分を取り戻す為には、それが必要だった。

一時間もしないうちに、迎えの車が来た。

「いってらっしゃい」

弓子は見送った。

「伽耶子」

男の子は、彼女をそう呼んだ。かつて、兄が呼んだ、姉が呼んだ同じ呼び方だった。

来年は小学校に入る。伽耶子自身は、幼稚園にも小学校にも通えなかったが、その子は、普通に成長していた。

姉、葉子と、兄、明彦の子。籍は、姉の私生児となっている。

名前は伽耶子が、太郎と付けた。幼稚園の発表会では、五匹の金魚のうちの一匹だった。運動会では三等賞だった。人より秀でた所も、困った程に劣った所もない。

伽耶子は、太郎の一挙手一投足に一喜一憂する、世間的に言うなら、一人息子を溺愛する母親になっていた。

伽耶子は時々、兄の姿を見に、友康のもとへ出かけた。

樋山という表札が掛かっている。友康にとってどんな思い出の残る家なのか、伽耶子は知らない。友康が白居家に引き取られてからは、空家になっていた。

友康が海老沢病院に入院していたのは、三日間だった。明彦にとつての、それが限界だった。葬儀の翌日、友康は明彦を連れ出して、この家に帰った。もし、そうしなければ、明彦は病院に入れるしかなかった。ただ、うつらうつらと眠り、目覚め、食べることも、排泄することもなく生きていた。体力が尽きて

寝たきりになれば、栄養を補給する管を繋げなければならなくなる。明彦の何が壊れてしまったのか、誰にもわからなかった。

友康が促せば、例えば、箸を持たせれば、ご飯を食べた。便所に連れて行けば、自分で用を足すことはできた。ただ、友康が促さなければ、ゼンマイの切れたおもちゃのように、ピクリとも動かなかった。友康によつて明彦は、人間の振舞いをする事が出来た。

樋山家には、柿の木があった。白居家のように、見事なものではなかったけれど、古い古い昔話に登場しそうなその家の庭には、よく似合っていた。柿の木の向こうの縁側に、明彦の姿がある。縁から裸足の足をゆらゆらと垂らしたまま、ぼんやりと座っている。何も目に留めず、何もかもが目に入る。眉にかかる漆黒の髪も、ガラス玉のような目も、長い四肢も変わらぬ。伽耶子は垣根越しに兄を見つめる。

伽耶子は、生まれた時からずっと兄の心を見て来た。兄の心の風景。今、それは、黄昏の岸辺のようだった。何もかもが判然とせず、けれど、闇でもない。太陽もない。気持ちの良いゆらぎの中でぼんやりとしている。兄の望み続いていた平安とはこんなものであるのか。植物のように生きていく。もし、友康が出先で交通事故にでもあったなら、兄は、このまま餓死してしまうのだろう。

伽耶子は兄を見ながら、兄のはしばみ色のオーラを見ている。

人の何を愛するのか伽耶子にはわからなかった。兄は自分の半身で、愛する対象ではないのかもしれない。今、兄が姉を失ったという現実から逃れて、黄昏の岸辺に住むなら、それでいいのかもしれない。自分たちふたりも森で、ただただ、肩を寄せ合って生きていた。木の根元にじつと座って、兄のはしほみ色のオーラに寄り添って。伽耶子には、それで十分だった。この世界で生きるためには、本当は他に何もいらぬ。

それでも、今、白居家へ帰るのは、太郎が待っているからだ。

友康も同じだった。

友康は、木を丹念に世話するように、明彦の世話をした。

夕方、湯を張った浴槽に明彦を入れ、洗い場で背中を流す。

夏至近くの、まだ明るい風呂場では、丸い水滴が光を受けながら、肌の上を転がり落ちて行く。産毛に引っかかると、つるりとした表面は、ピシヤリと弾けて、陽の光を乱反射する。

ゆるゆるとすべる石鹸の泡。背中を流すタオルの向こうに、人の体温がある。友康は自分の右手に、葉子の右手が、あの森の木々の手が、のせられているように感じる。自分が世話するこの若者は、葉子に愛され、森の古木に愛されていた。量の多寡が質を變じるように、この幻覚は友康の心を変化させる。彼の愛した葉子は、森の木々は、この若者を愛していた。

静かな二人の生活の中で、その思いは毎日毎日繰り返される。手渡すコップの表面で、指が振れた時にも、夜眠るようにと瞼

に手を当てた時にも、明彦に触れる友康の手には、明彦に思いを寄せる多くの手が、重ね合わせられている。

何も考えなければいい。友康は静かに目をつぶる。この日常は繰り返されるだけ。そこに何の意味がある訳ではない。人も木も、星でさえ、すべて生まれて死ぬだけ。そこに何の意味がある訳でもない。

葉子の死から、一年が過ぎた頃から、再び友康は明彦を連れて、ふらりと旅に出るようになった。二人の生活費も何もかもを、葉子は用意して逝った。友康は、明彦の世話をするだけだけよかった。

けれど、友康は旅に出る。この四年のうち、家に戻っていたのは、年の十分の一にも満たない。

十一月に入つてすぐの曇つた日だった。珍しく友康の方から白居家を訪ねた。

来月の葉子の命日には、恐らくこちらへは戻っていないだろうから、線香をあげに来た、と伽耶子に説明した。

「兄さんは家？」

「いや、このまま行こうと思つて、門の前で待たせてる」

あの日以来、友康は、明彦にこの屋敷へ足を踏み入れさせたことがない。

「そう、また、長い不在になるのね」

友康は答えなかった。伽耶子がよく兄の姿を見に来ているのは知っている。子どもの頃から、門の前で、ずっと兄の帰りを待っていた。今も、垣根の向こうで、じっと飽かず、兄の姿を見つめている。旅に出て、伽耶子からそうした時間を奪うのは、申し訳ないことのように感じていた。

明彦はある意味病人なのだろうが、楽な病人だった。体は健康であつたし、何をしゃべることも要求することもない。そして、脳が壊れている訳でもなく、友康の要求することは、そのまますんなり理解する。そこで、待つように言われれば、いつまでもじっと待ち続ける。

外で、子どもの悲鳴のようなものが聞こえた。二人が驚いて玄関に出ると、

「太郎ちゃん、太郎ちゃん」

タズが大声をあげながら、太郎を抱きかかえて、門から駆けて来る。五歳児とはいえ、もう六十を過ぎたタズには大変な重さであつた。足を縛れさせ、息を切らしている。伽耶子が駆け寄ると、太郎は白眼を剥いて、口から泡を吹いていた。見た事はないが、癲癇の発作ではないか、と思つた。が、そういう時どういふ対処をすべきなのかは知らなかつた。

「舌を噛まないように、箸をいれるとか……」

タズも言つてはみたが、力いっぱい食い絞められた口に、何かを入れるというのは不可能に思えた。

「海老沢先生に……」

伽耶子が母屋へ走ろうとするのを止めて、友康が携帯から連絡した。海老沢悠一ではなく、若い医師がすぐに駆け付けてくれた。手馴れた処置を行うと、あれほど三人をパニックに落とし入れた太郎の症状はすぐに納まり、意識を取り戻した。

「もう、大丈夫です。でも、後で検査に来て下さい」

医師はそういうと戻つて行つた。

「タズさん、悪いけど、太郎をすぐに、海老沢さんへ連れて行つて下さい。私も兄さんを見送つたら、行きますから」

「はい」

タズは、太郎を連れて、玄関とは反対の病院側の戸口に向かつた。

「太郎、すぐに行くから、いい子で待つてね」

伽耶子が声をかけると太郎は振り返つて、こくりと頷いた。

友康の目が見守る。自分と明彦の上には、何の時間も流れていないのに、伽耶子はどんどん母へと変わつていく。そして、太郎も成長していく。

明彦の待つ門の外へ出た。明彦は、そこに立っていた。今の騒動にも何の反応を示すこともなく、立ち続けていた。

(太郎は、兄さんの子なのに)

生まれてからはもちろん、お腹にいた時だつて、兄の口から、子どものことを聞いたことはない。

もし、明彦が太郎を認識したことがあったとしたら、それは、生まれてすぐのあの時だ。

「お大事に」

友康の言葉が伽耶子の思考を遮った。

「太郎君、何でもなければいいが」

「はい、今まで一度もこんなことはなかったのに……海老沢先生によく伺ってみます」

友康が会釈して、明彦を促し、歩き始める。

「兄さんのこと、よろしくお願いします」

深々と頭を下げる。

伽耶子が顔を上げると、二人はもう後ろ姿だった。見送りながら、中断した伽耶子の思いが込み上がって来る。

（あの時……兄さんが看護婦を殺した時……あの力の先にいたのは、太郎だった）

## 朴の木

日が落ちると、山陰が闇となつて、その廃校を飲み込んだ。廃校とは言つても、この三月まで使われていた。建物はしっかりしていたし、埃も積もっていなかった。山肌に沿った旧国道ではなく、山を貫通する新しい国道に、村の期待は集まつて

いる。岩盤の強度、排水等、地形的な観点から、道はこの校庭を横切ることになった。少子化の影響もあつて、小学校は中学校に統合されることが決まつていた。

友康は、明彦とともに、この廃校にやつて来た。今まで、枯れようとしている木の手当てを頼まれてきたが、今回は全く勝手の違う依頼だった、一言でいうなら、ここに生えている朴の木を宥めて欲しいということだろうか？

校庭に抉られたような穴がある。朴の木を、切り倒して引き抜こうとしたクレーン車が突風に煽られて横倒しになった。三人の死傷者が出た。

朴の木の崇りは、ずっと語り継がれて来た。

実際、江戸時代、この朴の木を切ろうとした五人の村人は、次々と変死した。明治時代に起こった、村人の大量中毒死事件は、朴の葉に包んだ握り飯のせいだった。その時も、秋には木を切つて、小学校を建てるという話が決まつていた。けれど、百有余年もの間に起こった二つの偶然は、単なる昔話でしかない。

この過疎化する村を救う新しい国道の建設を取り止める合理的な理由は何も無い。誰の心にも、迷信の陰はあるかもしれないが、崇りなどという馬鹿馬鹿しい発想は、現実の問題に比べるべくもなかった。

つまらない田舎の選挙ではあつたが、村長も村議会議員も、国道の建設推進については熱弁を振るつた。

それが、今、三度目の敗北によって、怖気づき始めている。今だかつて、この地にクレーン車を押し倒すような突風が吹いたことはない。朴の木の方だと、口に出さなくても、誰もが思っていた。しかし、妖怪映画でもあるまいに、そんなできすぎたストーリーを真顔で話す時代ではない。

村長は、村を覆っている迷信を、他所者に説明するのは不可能だと諦めた。工事関係者には、迷信を信じる者もいるだろう。しかし、そういう者にとつても、ここに道路を造ることは日々の糧を得る仕事であり、朴の木は他の木と何ら変わりのない一本の木ではない。

どういう類のことが、解決方法なのか見当がつかなかった。「お父さん、あまり意味はないかもしれないけど、世の中には樹医っていう人がいるんですって。樹木の樹に、お医者さんの「医」

そろそろ三十歳になろうかという村長の娘の言い出したことだった。

「じゃが、樹医さんと木の呪いは、関係なからう」

「そうね、樹医さんは、内科医で、あの木に必要なのは精神科医かしら」

別に、夕食後の軽い会話だった。それでも、何程の知恵もわかぬまま、村長は、娘を通じて、その樹医とやりに連絡を取る事にした。

廃校に着くと、友康たちは村長とその娘に迎えられた。電話では、断ることのできぬほど、強引な村長であったが、それは、実際に会っても同じことだった。ほとんど友康に返事の問も与えず、村長は朴の木を指差して

「とにかく、明後日あの木の伐採作業が無事済むようにして欲しいんだ。君のお陰であろうがなからうが、無事済んでしまえば、お礼はする。どうだ悪い話じゃないだろう。」

ほら、家を建てる時にやる地鎮祭。効果の程がどうというより、今回朴の木の崇りに対して我々がどんな努力をしたかが、大事なんじゃないよ。他所者には馬鹿馬鹿しいと言われたって、村人は信じてる。村長として手を拱いている訳にはいかんだ。

だから、君は君なりに努力をしてみてくれたまえ。有難そうな呪いでも、注連縄しめなわでも、何でもいいんだ」

まくしたてた挙句に

「いろいろ忙しくてね。後は娘に聞いてくれ」と言い残して去って行った。

後に残った娘は、深々と頭を下げた。

「面倒なことをお願いしてすみません」

廃校の敷地内に、赴任してきた教員の住居にあてられている棟があった。

中に入って、お茶をいれながら、娘はしみじみと話した。



「そうですね。あの朴の木からしたら、静かに死んでくれて言われているようなもんですよね」

友康は、一口お茶を啜った。明彦はただその後ろに座っている。

「お医者さんにそんなこと、馬鹿馬鹿しい依頼ですね。わたしたちが自分勝手なだけ」

友康は素直な娘の物言いに珍しく好感を持った。いつもの口の重い彼にしては饒舌だった。

「木だって、自分勝手なもんですよ」

「木にも、自分勝手なんてあるんですか」

そう聞き返しながら、娘の動作は、明彦にお茶を勧めている。もちろん、明彦に反応はない。

「伸びて行く木は、その周りに飛んで来た種をみんな蹴散らして、自分だけが大きく大きくなって行く。木の生存競争は哺乳類の比じゃない。木の種はあんなに創られて、飛んで行くんだから」

「そうなんですか……」

娘は少し考えて付け加えた。

「なんかそう言ってもらえると気が楽になるような」

彼女が視線を上げると

「受け売りです。自分もそう言われて楽になった」

友康の目は、遠くを見ていた。

「お母ちゃん」

二人の間に、突然、おかつば頭の女の子が割り込んで来た。一瞬、太郎かと錯覚した。年の頃が同じせいでらう。

「お子さんですか？」

「はい、今年一年生になりました。ここに通うはずだったんですけど、廃校になったんで」

「おじちゃん、あたしこの学校に通うの楽しみにしてたんですよ。待っててくれたのがっかり」

太郎よりは、ひとつ年上らしい。けれど、言葉の量は、十倍でも済みそうにない。

「でもね、あっちの学校は中学校もいっしょになってるで、いっぱい人がいて楽しい。ちよつと遠いけど、行く道はたっちゃんとずつといっしょだし」

話しを始めると止まらなくなるようだ。

「ねえねえ、あっちのおじちゃんは、なんでじつとしてて動かないの？ねえねえ」

女の子の関心は明彦に移って行った。母親の手を引っ張って、聞く。

「亜子、失礼よ！」

母親に注意されてもおかまいなしに、少女はすつと立って明彦に近寄る。友康は、庇うように少女の手をとって座らせた。

「このおじさんは、心の目が見えなくなつて、周りで起きていることがわからないんだ」

「心の目？」

「だから、びつくりさせないであげてくれるかな？」

「そうと？」

亜子は自分でそう言いながら、そつと明彦の手に触れた。やはりなんの反応もない。

「見えないから？」

亜子のあどけない表情が、覗き込んだ、明彦のガラス玉のような水晶体に映っている。

「治んないの？ 心の目つてどうして見えなくなっちゃうの？」

「大事な人が死んで、それを見ない様に目を閉じたんだ」

友康はこの返事に亜子ではなく、その母親の表情が変化したことが気にかかった。

翌朝も、親子は食事の支度に来てくれた。

母親が給仕すると、付いて来た亜子が、さつと明彦に近付いて、箸を手に持たせた。昨日の夕食の時の友康の行動を見ていたのだろう。けれど、明彦は持たせられた箸を動かそうとはしなかった。

「おじちゃん、おじちゃん」

少女は明彦の目の前で、自分の両手をヒラヒラ振った。何の反応も戻って来ない。

「いめんよ」

友康は、亜子に謝ると、箸を明彦の手に握らせ直した。スイツチの入った人形のように、明彦が食事を口へ運ぶ。

「えーっ！ どうして。不思議！ おじちゃん、魔法使いみたい。おじちゃんのことだけは見えるの？」

亜子は大騒ぎだ。けれど、その陰で

「亜子でも、駄目なんですわね」

母親の呟きが友康の耳に残った。

親子が帰っても、友康は村長の娘のことが気にかかっていた。

『森 佐菜子』と名乗った。友康が呼ばれたのは、佐菜子の発案だと、村長は、声高に自慢していた。朴の木の呪いを解く樹医とでも、宣伝されているのだろう。

『この木を切つて無事道路を完成させねばならない』村長は大音量で吹聴する。けれど、発案者とされる佐菜子の口から、そんなことは一言も洩れて来ない。彼女にはどうでもいいことなのかもしれない。

大体、どうして佐菜子は、明彦のことを何も聞かないのだろう？

どこへ行っても、聞かれる。それは当たり前だ。行動のパターンが特異過ぎる。何も見えない目、不安定な足取り、一言も口をきかず、無反応。そんな人間を連れ歩いていけば、根掘り葉掘り質問を浴びせかけられる。聞かない方が不自然だ。

友康は、一人外へ出た。校庭の外れに、一際大きく枝を広げた朴の木がある。十二月だというのに、青々とした葉を、まるで威嚇するように纏っている。葉子が死んだ日の桜の古木のようだった。

友康は、ゆっくり朴の木の方へ歩いて行った。

木の後ろから小さな人影が現れた。亜子だ。

(帰ってなかったのか)

家は近くらしいから、一人で遊んでいても不思議はないが。

誰かと話をしている。

「違うよ、そんなことない。お母ちゃんは、あたしの味方でもない」

亜子の声が聞こえてきた。

「だって、そんなことないもん」

亜子は必死に抗弁している。

「あたしだって、楽しみにしてた。学校に来て、いっしょにいられるの楽しみにしてたもん」

誰と話しているのか。朴の葉が揺れている。

「違う、違う！ おかあちゃんは悪くない！」

「何をそんなに恨むんだ」

友康の声に、亜子が振り返った。

「おじちゃん」

友康には、今はつきりと朴の木の姿が見えていた。人も木も

ない。ありのままであることの姿。亜子の母、佐菜子によって、友康が呼ばれたことを、この木は知っている。

「彼女の何を恨む？ 彼女にまで、危害を加えるつもりなのか」

友康の声に、亜子の目が大きく見開かれた。

「おじちゃんにはわかるんだね」

朴の木は、葉だけでなく、その枝までも揺らし始めた。葉擦れとは思えないほどの大音量。木がその動けない体を力の限りに軋ませながら、友康を威嚇する。

(生きてきた。人間なんぞより、ずっとずっと。生きて、生きて、生き抜いてきた。なんでこんなちっぽけな奴らに殺されにやならん！)

木の苛立ちが伝わって来る。友康に、木を否定することは出来なかった。

娘を探して、佐菜子が戻って来た。

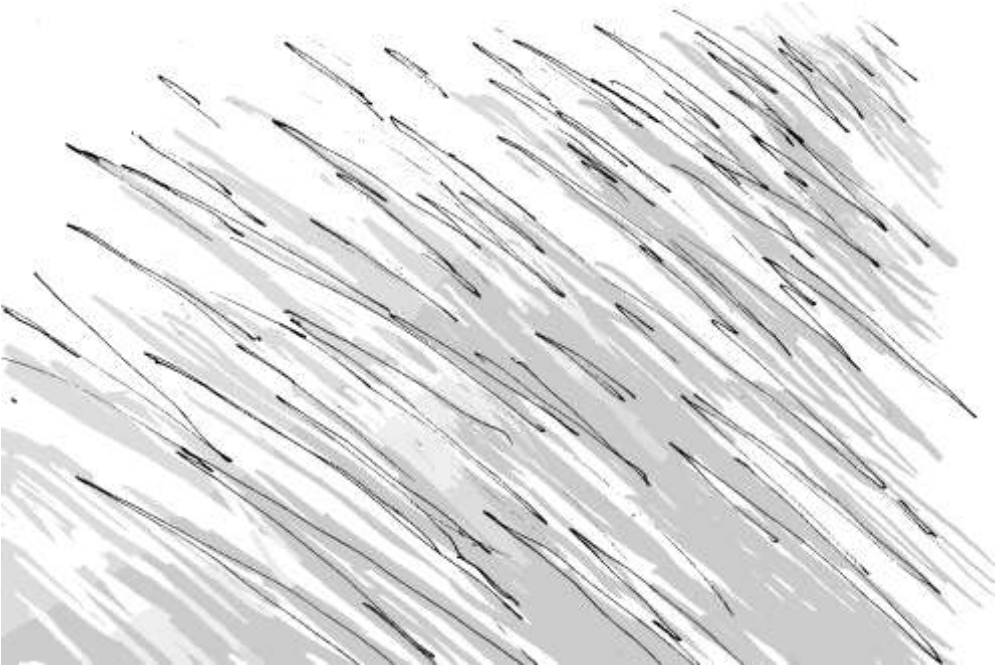
「亜子、亜子！」

立ち止まる。何かを感じ取った。自分に向けられた悪意。朴の木を背景に立つ我子と友康の異空間。

亜子が走った。母に辿り着く。思いきりその手を引く。何を問う間もない。

(遠くへ)

朴の木から離れねばならない。小さな体に満ちた気迫が、母に緊急を知らせている。亜子に引かれて、佐菜子も走った。何



かが追って来る。そのことだけは、はつきりわかった。

(逃がさぬ！)

朴の木が追った。地に根を張った植物が親娘を追う。

木の実はそのままだに、木は確かに親娘を追っていた。根が伸びる。地が割れる。足元をすくわれる。奈落へ落ちる。

人間への怒り。ただ、立ち尽くすしかないものへの理不尽な攻撃を木は憎んだ。そして、その憎しみのすべてが、この逃げ人間に向けられる。

(わたしがおまえたちに何をしたというんだ！)

「何もしていない」

木の問いに答えるものがいた。

「おまえは、何もしていない」

木の耳に、その声ははつきり届く。

人のぬくもりが、木を覆う。友康は、木を止めた。幹に取り続ったまま、その身を木に投じる。

木の苛立ちが、怒りが吸い取られて行く。友康の心が、木の運命とともに落ちて行くからだ。木のすべてを包み込んで、友康のオーラが消えて行く。

亜子が振り返ると、友康は朴の木の根元に倒れていた。

友康が昏睡状態で、病院に運ばれたと、連絡が入った。電話口の伽耶子の声は震えていた。笹原は、自分が迎えに行くと、答えた。友康がそういう状態であるということは、明彦の生命

が脅かされているということだ。一刻を争う。自家用機の手配をした。

森佐菜子は、病院を出ると、明彦のいる廢校に戻った。

亜子を置いてきたが、大丈夫だったろうか。ずいぶんと時間が経ってしまった。もう日も暮れようとしている。

玄関に入る佐菜子に亜子が跳び付いて来た。

「おじちゃん、大丈夫？」

亜子の第一声はそれだった。どうなのか？ 佐菜子にもよくわからない。ただ、眠っている。それも深い深い眠りだ。

「おじさんは、眠っているだけだって」

「すぐ、目が覚めるの？」

「わからない」

医者に事情を聞かれても、父親に説明を求められても、なにも答えることは出来なかった。自分にだって、何もわからない。

あの時、亜子は何から逃げようとしていたのか。自分は何が追い駆けてくると感じたのだろうか。

「どうしてこんなことになったの？ あの時何が起こったの？」

おかしい質問だと思う。一人の人間が突然、昏睡状態に陥る。

それは、病気以外には考え難いだろう。それなのに、自分はずか六才の子どもに何を尋ねているのだろうか。

でも、おかしくても、説明できなくても、自分にはわかって

いる。佐菜子は、そう確信していた。あの時、自分に危害を加えようとするなにかが、自分と亜子を追ってきた。あの樹医はそれを妨げようとした。

「あの朴の木が関係してるの？」

自分は村人と同じように、今迷信を信じようとしている。

少女は、幼い顔になって、母親を見上げる。

「何言ってるの？ わかんないよ」

亜子の瞳は六歳の無邪気さで母を見つめる。

「あのね、もう一人のおじちゃんは全然駄目。お昼ご飯にパンをあげたけど、食べないし、動かない」

亜子は、母親の質問をはぐらかした。

「そう」

佐菜子は、部屋の隅に、じっとしている明彦に視線を移した。

七年前と全然変わっていない。その横顔も、何を見ているかわからない目も、膝に置かれた長い指も。

白居明彦の消息は、旅行途中に立ち寄ってくれた昔の同僚から聞いた。

（重度の鬱病で会社を辞めた）と彼女は言った。それは、どこか納得のいく答えのようでもあり、見当外れのような気もした。

東京に憧れて、出版社に勤めた。親は、娘に甘かった。若い時には、そういうことも仕方ないと、無理に止めはしなかった。

佐菜子自身も、人生を甘くみていた。心のどこかで、一人娘

の自分が結局は親の面倒をみるのだから、しばらくは好きにさせてもらおうと高を括っていた。

初恋に騒いだことはあっても、八百屋お七など、ナンセンスと思っていた。自分は見合いで、地方の名士である実家に入ってくれる人と結婚することになると思っていた。

そして、白居明彦と出会った。  
はなから負けだった。

会社に居る時が、一番楽しかった。外で偶然を装って、出会っても、明彦は会釈する程度で話しかけても来ない。会社を出てから、翌朝会社で明彦の姿を見るまで、ずっと明彦のことばかりを考えていた。

相手の、何も知らないままに、何故こんなに好きになったのか自分自身が不思議だった。

他にも、明彦に気のある子はいたけれど、佐菜子は、恐らく自分が一番努力したと思う。その甲斐あって、まわりの応援を得た。同僚が気を使ってくれて、明彦の気持ちとは関係なく、恋人同士のように扱われるようになった。

今にしてみれば、明彦は、それに流されたのだと思う。

カップルになって一年が過ぎると、一人相撲に疲れてきた。

その挙句、自分で悲劇の主人公のような気持ちになって、田舎へ帰った。

リセットしたかった。明彦と出会わない時の自分に戻りたかった。そうしようと決心して、その踏ん切りがついたから帰っ

たつもりだった。

いや、うそだ。それだったら、あの日、自分を抱いてくれと、最後ののだから、と迫ったりはしなかった。踏ん切りなどつかなかった。ずっと、ずっと、未練ばかりだった。

亜子を生んだのも未練だ。随ろして、やりなおせばすんだのに。未来に、明彦の子を育てている自分が、明彦と再会する場面を思い描いた。

が、田舎で私生児を生むという過酷な現実には、すぐにそんな幻想を打ち砕いた。人はぬくもりを持った刃だと思ふ。手を貸し、優しくしてくれる人々がそのまま、切りつけてくる。(都会でのふしだらな生活の挙句)佐菜子につけられたこの枕詞は、どう努力しても消せなかった。亜子が後ろ指を指されているように辛かった。

亜子が小学校に入る前、一度だけ一人で東京に行った。明彦に亜子の存在を知ってもらおうと思った。認知してもらおうだけでも亜子の将来のプラスになるのではないかと考えた。

樋山と表札の掛かった家の前。いつまでも、呼び鈴に手を伸ばせなかった。長い時間立ち続け……それでもあきらめきれずに、裏へ廻った。庭の向こうに明彦が居た。

人の未練とは、なんだろう。

父親に朴の木の話をされて、樋山友康に連絡を取ることを頼まれた時、断らなかつた自分の行動も未練の果てなのだろうか。

庭の向こうの明彦。何も認識しない男。恋人としての再会どころか、再会という言葉さえ使えない。

それでもまだ、望んでいる。何を望んでいるんだろう？

今、手の届く所に明彦がいる。明彦を手に入れてしまった。

病院で、父が連絡するのを見ていた。すぐに友康と明彦の迎えが来ると言っていた。

「亜子、行こう」

佐菜子は、立ち上がった。

「ごいっく」

「どこでもいいの。遠くへ行つて暮らすの」

佐菜子は明彦の手を取った。ひんやりとした感触。すべらかな感触。佐菜子は覚えていた。体の奥が熱かった。

明彦は、なかなか立ち上がるとうしないが、佐菜子は諦めなかった。

「お母ちゃん、駄目だよ。おじちゃん、いやがつてるよ」

「いやがつてなんかじゃない。だって、何にも言わないじゃない。

何にもわかんないじゃない。私が誰かつてことも。亜子のことだつてわかつてくれない！」

力まかせに明彦を立ち上がらせると、佐菜子はそのまま引き摺るように戸口へと連れ出した。

「お母ちゃん、あの眠っちゃったおじちゃんのこと探してるよ。どうしていないのかつて。誰が連れていっちゃったのかつて」

亜子はそう言うが、明彦には何の表情も表れない。

「そんなこと言つてない！ この人は、いつだって何も言わない！」

あの日、情事の後、佐菜子は、本当は帰りたくないと言った。

明彦は何も言わなかった。ただ、深い罪悪感が、その表情に刻まれていた。それが、答えだった。再会がなされなかったのは、明彦が壊れてしまったからじゃない。もともとそんなものは、佐菜子の幻想でしかなかった。明彦は一度も佐菜子を求めたことも、愛したこともない。

『治んないの？ 心の目つてどうして見えなくなつちやうの？』

『大事な人が死んで、それを見ない様に目を閉じたんだ』

亜子の問いに友康はそう答えた。

佐菜子は、もう嘔出してしまった自分の気持ちを制御出来なくなつていた。

それでも、あの時の明彦に、大事な女性はいなかった。自分ではない誰かはいなかった。あの後、明彦は誰かを愛したのだ。

そして、こんなに成る程、壊されてしまった。

(胸が苦しい、息が出来ない)

この村で、私生児を生んで暮すことは辛かった。自分で選ん

だことなのだと、言い聞かせながらここまでやってきた。七年が七十年的ように遠い。

だのに、突然こんなにも生々しく心が切り裂かれる。

(明彦が、誰かを愛した。自分ではない誰かを)

ルシファーもカインも得られない愛を求めたものの末路は哀しい。それは、愚かしい悲劇で幕を閉じる。

それでも、佐菜子は明彦の手を引いて、外へ出た。

日が沈もうとしていいる。夕焼けが不吉な赤さで辺りを染める。

閉じられた空間から、突然、突き抜ける視野。風が渡る。人の体に触れ、拡散していく。空までの空間がすべてこの身に落ちてくる。

明彦が、ひとつ、大きく息を吸った。

朴の木を見た。初めて反応した。自分の力で歩いた。佐菜子の知っているしなやかで、柔軟な足の運びだった。

「行かないで！」

佐菜子が明彦を捕らえようとする。

「……」

何も言わない。声の主への一瞥もない。

「行かせない！」

佐菜子が後を追う。けれど、解き放たれた獣は、走っているようにも見えないのに、追いつけない。

若い野獣は、真っ直ぐに、赤く染め上げられた朴の木に向か

って行く。

彼の目には友康のオーラが見えた。朴の木を絡めて、包み込んでいる。この木が友康を自分から遠ざけたことを感じた。友康に危害を加えたことを知った。

朴の木の根元で立ち止まる。

追いついた。辺りは、ただ、ただ、赤い。

明彦の横顔も、夕日に染まっている。

佐菜子は、明彦の左腕に取り纏った。取り纏る佐菜子の手も赤かった。執着の赤だと知った。殺しても、この手を離したくなかった。愛されなかつた事も辛い。けれど、明彦が誰かを愛したことはもつと……許せなかつた。

明彦が、右手を朴の木に翳す。

触れてもいなかつただろう。明彦の体のどこにも、何の力もこめられてはいない。ただ、すつと右手を翳した。

朴の木は、木々端微塵に消えた。雨散霧消。破片もなかつた。

どんなレベルにまで分解されたのか。存在の跡形も見えぬ消され方だった。

そして、森佐菜子も。

静かな爆風に吹き飛ばされたかのように、消えた。



亜子が見ていた。

そして、そのずっと後方に笹原由宜が立っていた。

彼もまた見てしまった。

(なぜ……)

笹原は深いため息をついた。一瞬の太陽の赤みは消えて、闇が人を包み込んで行く。

(なぜ、今、ここで、こんな力を見せつけるんだ！)

稜線が黒い陰となる。地球の形。

空の闇に星が瞬く。宇宙がそこにある。

(ノアは、善人だったのに)

笹原は、静かに明彦に近付いた。

姫君を迎える騎士のように、その左手を取った。

爪痕が残っている。赤い血を含んで、蚯蚓腫れになっている。

肩に手を廻すと、ずっと自分に牙を剥いていた獵犬が静かに頭を預けてきた。

もう抗することは出来ない。神がそれを望むなら、踏み出すしかない。

十六年間一度も、口にしたことのない名が口を突いて出た。

「透子」

**「破壊神」(第三話)**  
著者: 秋本カイ

おまたせしました。ファン特望の続編がついに登場です！  
閉じられた世界の夢であった葉子を失ってしまった白居家の兄妹と、それを巡って織り成される人と人との不思議な縁と繋がりをも今度も精緻でありながら力強い筆致によって丁寧に描き出しています。

どうやら第四作の構想もすでに固まっているようなのでこれからもますます目が離せない作家のひとりです！

悟しむらくは  
挿画の戸谷展洋が  
あまりにも作品世界を語れていないということでしょうか。  
はいという意見も

今回も  
凄いです

